インタビュー

湖と生きる

モノ語る　先人の労苦と知恵と愛

田上郷土史料館館長
東郷 正文さん

半世紀前、高度経済成長によって激変する農村で、二人の若者がゴミ集積場で拾ったひとつの民具。そこに詰まった知恵に魅かれ、捨てられる民具を集め始めた二人の活動は、村の人々の心を動かし、農村の生活史を丸ごと保存・展示する住民手作り資料館「田上郷土史料館」(大津市牧)に育った。その一部、「田上の衣料生活資料」は１年前、国の登録有形民俗文化財となっている。館長の東郷正文さん(83)に、その歩みと、ふるさとへの思いを伺った。

東郷正文（とうごう・まさふみ）さんと史料館の歩み

- 1937年１月　真光寺に生まれる。村の唯一の寺で開基は1321年。
- 1961年　中学校の社会科教員に
- 1960年代半ば　同級生の田村博さんと民具収集を始める
- 1969年１月　牧郷土資料館が開館(５月に田上郷土史料館と改称)
- 1970年　田上太鼓踊りの調査会発足
- 1971年～1979年　『田上の民俗』など４冊の館報を発行
- 1990年　30年間の教員生活を終え、住職と史料館の活動に専念
- 2008年　龍谷大学で「暮らしの中の造形展　田上絣と手拭」開催
- 2017年　大津市歴史博物館で「田上てぬぐい　暮らしと文化」開催
  東郷さんが大津市文化賞受賞
- 2019年　「田上の衣生活資料」が国登録有形民俗文化財に
  史料館が滋賀県文化功労賞に選ばれる。

（※）田上郷土史料館は大津市牧１丁目８－32（077・549・0369）
見学を希望する場合は必ず事前に連絡をして下さい。

聞き手・三宅　貴江
写　真・中村　憲一

元農業倉庫を使った第二史料館の内部

大津市牧は田上山のふもとにある120戸ほどの農村で、県内でも有数の良米の産地だ。史料館は東郷さんが生まれ育った寺(浄土真宗真光寺)の境内と歩いて数分の元農業倉庫の2カ所にあり、農機具を中心に江戸期から昭和の民具数千点が並ぶ。目の前には田んぼと瓦の美しい家並み。「民具たち」は、使われていた暮らしの風景のそばで静かに休んでいる。

東郷　何点あるか？　わからん。籠だけで40、50点、いやもっとある。草取り機だけでも20本並べたる。今も、小屋やツシ(屋根裏)にあったわ、いらんかって声がかかる。

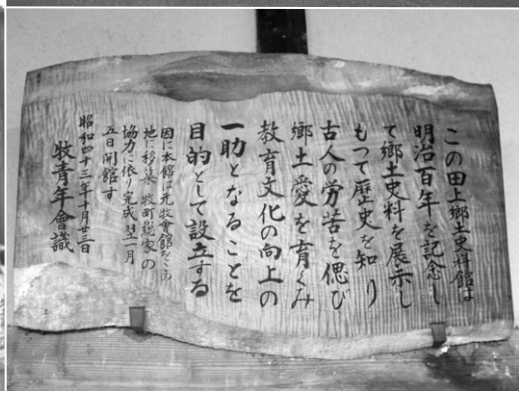
収集のきっかけは昭和40年代のはじめ、小中学校の同級生の田村博君(2007年死去)が、「ゴミの捨て場にあったぞ」って木馬みたいな道具を拾ってきた。勤め人が増えたころで、同級生で村に残っていた男性は、中学校教師兼副住職の僕と国鉄専務車掌の田村君だけだったから、しょっちゅう遊びに来ていた。「何やろ」「わからん」。村のおばあに聞いたら「ウマ(足踏み式綿繰機)やんか」。ふわふわの白い綿の実を入れて、手回しと足踏みでローラーを回すと種が荒取りできる。なるほど、それでこの形かぁ、おもしろいなぁ。ちょうど高度経済成長、列島改造のころで、いろんなものが集積場に捨てられる。籠類が多かった。拾ってきては、雨のあたらん本堂の軒下に並べた。あちこちからあそこにあるで、と声がかかるようになった。軒はもういっぱいや、入れるところほしいなぁ。自治会に相談したら、使われていない古い会館があるからと、境内に移築してくれた。コンクリ打つのも、柱や壁塗るのも、村のみんなが力を合わせてくれた。

史料館入口には「明治百年を記念して郷土資料を展示し　もって歴史を知り古人の労苦を偲び郷土愛を育み　郷土文化の向上の一助となることを目的として設立する」と記された木の板がかかっている。保存だけでなく、調査も続け、「田上の民俗」「田上のあしあと」「田上の寺院」「源俊頼歌集　田上集の里」という4冊の記録集なども発行してきた。

東郷　2人で一生懸命集めていたら、菅沼晃次郎さん(のちに滋賀民俗学会会長)が史料館へ来はった。「集めるのも大切やが、古老の話をきっちり書きとめておけよ」と助言を受けた。

それからは田村君と手分けして、民具の写真を撮って、日付と場所、おじい、おばあの聞き取り内容などをひとつひとつカードに残した。

田村君が外回り、ぼくは地域内の担当。分担がうまくいった。二人が違うことをしたか



写真㊤第一史料館では古い校舎の鐘が子どもたちを迎える。写真右㊤第二史料館の前で。
写真右㊦第一史料館の入り口に掲げられた設立趣旨

ら幅が広がった。同じことをしていたらうまくいかない。我も出てくるから。

収集対象は地域の民具だが、わからないことがあると、田村君が長距離列車の仕事の空き時間を使って遠方の現地調査もしてくれた。たとえば、揚水機の「龍尾車（りゅうびしゃ）」。長い桶の内側にらせん状の板がはられていて、上のハンドルでくるくる田んぼに水をくみあげる。高島市で流行ったが、滋賀だけでなく青森や秋田にもある。田村君が東北でも調査してくれた。

民俗学会の講習にも参加して学んだ。そこで民俗学者の宮本常一先生に出会えた。大津駅までの車中で僕が龍尾車の調査で佐渡に2回行ったと話したら、「私は佐渡に通うのは次で50回目」と。何もかもすごい人やった。

箪笥にぎっしり詰まっている調査カードは、研究者や卒論を書く大学生らの貴重な資料となっている。たとえば、「あんぐり小屋」という項目には、昭和40年代に上田上各地で撮られた掘っ建て小屋の写真がついた数十枚がある。今ではこの記録にだけ残る風景だ。

東郷　このあたりは山の際などあちこちに田畑が点在していた。あんぐり小屋は、集落から遠く離れたそんな田畑で終日農作業するための掘っ建て小屋で、石の柱に藁ぶきが多かった。車もない時代、ここに農具や肥料を置いておき、家へ食事に帰る時間も惜しんで働いた。夫は大八車を引き、妻は天秤棒の前後に赤ん坊とお茶や弁当を担いでいって、赤ん坊をかごのまま小屋の棟に吊り下げて、夫婦で終日働いたんや。明治生まれの古老のそんな話もカードに残している。

記録からはモノが秘めた物語が活き活きと伝わってくる。たとえば衣類。高度成長期前、地域では素材からすべて手作りだった。糸を紡ぎ、織り、縫い、何度も繕い、仕立て直し、端切れになるまで、だれがいつだれのために作ったかの記録とともに保存された衣生活資料（1358点）は2019年、国の登録有形民俗文化財になった。糸と布による田上版「女の一生」だ。

東郷　日常着は自分で織った綿の絣。文様の大きさにも意味があった。一幅に十代なら文様は二つ、年を重ねるとだんだん文様が増えて小さく地味になり、同じ一幅に十六もの文様が並ぶ。仕事着でも紐や帯の色や柄でおしゃれを楽しんだ。この地域では女性はどこに行くにも手ぬぐいを被った。農作業の日よけや防寒だけでなく、冠婚葬祭にも新しい手ぬぐいを被って行った。手ぬぐいの長辺の下部に文様がきて顔をひきたてるデザインで「田上手ぬぐい」として知られた。そんな衣生活

田に水をくみあげる筒状の龍尾車

田上の自然と田畑に囲まれた牧の集落

田上てぬぐい

資料が文化財になるとき、龍谷大学の先生たちの整理調査に、村の80代、90代の女性たちが毎回参加して、どう作ったか、どう使ったかを語ってくれ、詳細な記録が残せた。地域のみんなの力が実ったのがうれしい。

真光寺境内には井原西鶴『武家義理物語』の一文「江州田上川の瀬にかはりて、古代稀なる洪水、岸根の松柳もほれて、田地荒野なれば……」と刻まれた石碑がある。田上山は良木・良材の産地だったゆえに古代から大寺院や都の建設のための伐採が進んではげ山となり、大戸川に土砂が流れ込んで、地域は洪水にたびたび見舞われた。

東郷　この集落(牧)も二百数十年前、洪水で大きな被害を受け、大戸川のそばから500㍍離れた今の地へまるごと移ってきた。現在地の小字は「恋ノ山」。ここらへんは山やった。より安全な、恋しい、恋しい、あこがれの土地やった。この寺も神社と最後に移ってきた。そんな長い水害の苦労を経て、今の生活がある。忘れたらあかん。

史料館入口にはかつて小学校で使われていた「3年A組」の表示板と始業をつげる鐘が懸けられている。

東郷　地元の上田上小学校では、3年生の正月に地域学習のために史料館にやってくる。民具を見たり、動かしたりしてもらい、最後に七輪を並べ、焼き網をのせて、みんなで餅を焼いて食べる。最近は家では餅も電子レンジでチンだから、ぷくっと膨らんできたのに醤油をちょんとつけると大喜び。幼稚園には脱穀機とかまどを軽トラで持って行って、その場で稲穂から脱穀・精米し、三つのかまどで2升ずつ炊いて、おにぎりにして食べた。石山などちょっと離れた大規模小学校からも「教科書に載っているから見せたい」と頼まれて、糸車などを毎年貸し出している。先日はここで筵(むしろ)機を動かして筵も編んだ。

最近は、マッチも擦れないし、急須で淹れたお茶を飲んだことがない子どももいるから、実物を見るだけでなく、できるだけ使って体験してもらう。

そうすることで、先人の労苦、知恵、そして、四季の巡りの中で皆が集まって一緒に作業する喜びを感じてもらいたい。今の暮らしは助け合いがあって、初めてできた。工夫と改良を重ねて、創り続けて、今がある。

この村でも少子化が進み、半数の世帯は3人家族。美術館や図書館が集まる大津市の文化ゾーンから車で数分なのに、これからは過疎が進む。

地域のことを知って、ここに住みたいって思ってほしい。本当にええとこやぞ。